

島根県立石見美術館

研究紀要

第12号

2018

目次

史料紹介 防長古器考所収の中世石見地域関連工芸品……………目次 謙一 1

収蔵資料紹介…『森英恵流通信』……………廣田 理紗 22(1)

史料紹介 防長古器考所収の中世石見地域関連工芸品

目次 謙一

中世石見国では、在庁官人や地頭等を祖と仰ぐ諸領主が各地に割拠していた。平成二十九年度の企画展「石見の戦国武将・戦乱と交易の中世・」では、美濃郡の益田氏ら御神本氏一族を主に取り上げ、あわせて中世石見国の対外交流と地域文化を紹介した。

同展では、近世萩藩で編纂された書物である防長古器考のうち、益田氏関連の記述を含む三件（三冊）を展示した。同書には、中世石見国に関わる記述がほかにも見受けられる。これらは、中世石見国の文化や歴史美術の理解に資する史料として評価できると考えられよう。管見の限りだが、本稿でこれらを翻刻し紹介したい。

あらかじめ、防長古器考について概括しておく。同書は、萩藩が藩内諸家伝来の器物・文書等を調査した記録である。一七六九年（明和六）から一七七四年（安永三）にかけて、はじめ小笠原長鑑、その没後は林以成が編纂した。総目録一冊・有図の部（挿図あり）九二冊・無図の部（挿図なし）六八冊の合計一六一冊の和本（縦帳）で構成され、現在は山口県文書館が所蔵している。全体のうち、小笠原長鑑編纂の一〇家分が前集、林以成担当の残り九〇家分が後集と区分されている。

同書は、一九九二年（平成四）に『防長古器考』上中下三巻として、マツノ書店から影印本が復刻されている。影山純夫氏が校注および付録（目録・解題・用語解説・同参考図）を手がけられた大部

の労作であり、本稿も多くをこの刊本に負っている。

萩藩では享保年間から明和・安永年間にかけて、閩閩録・寺社証文・譜録という歴史資料を収集・編纂した記録が成立した。これらには主に系譜と文書が収録されており、器物を主とする防長古器考とは対象が異なる。が、影山氏が解題で述べられているとおり、器物に基づき所蔵者の家の由緒を明示することが本書に期待された役割である。その意味で本書は、閩閩録等と相互に補完し合う存在と評価されている。

こうした防長古器考の編纂目的も反映してか、影山氏によると所蔵者の多くは武家で、収載器物の半数以上は武器である。本稿で扱う中世石見国関連の記述でも武器がほとんどを占め、甲冑等は詳しく記されている。ことに益田氏に関しては、室町幕府將軍との関係を伝えるものや南蛮貿易との関連をうかがわせるものが含まれており、その動向や地域性を考えるうえでも注目されよう。吉見氏を継承した大野毛利氏と、吉見氏家臣らがともに確認できるのも興味深い。小笠原・口羽・祖式・佐波・出羽といった、邑智郡の領主も多く見受けられる。

展覧会時の借用や事前調査等では、防長古器考を所蔵する山口県立文書館および同館職員の方々をはじめ、事業関係者の皆様に厚くご配慮いただきました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

凡例

- 一 翻刻の底本には、小笠原長鑑・林以成編、影山純夫校注『防長古器考』三卷（マツノ書店、一九九二年）を用いた。
- 一 翻刻対象は、原則として中世に石見国内で本領を有していた領主に関連する器物の記述とした。ただし、該当品の来歴が中世石見国と無関係と判断されるもの（萩藩主の下賜品等）は省略した。
- 一 図は（図）と省略し、その後に図中の註記を続けた。本文の翻刻へ再び戻る際は適宜（本文）と挿入している。
- 一 所蔵者ごとに、翻刻の冒頭で、冊子番号・前集と後集の別・刊本の巻名と頁・所蔵者名を【】内に記し掲げた。
- 一 字体は原則として新字体を用いた。
- 一 底本の読点（・）及び句点（。）はそのまま活かした。そのうえで並列点（・）を適宜施し、読解の便宜を図った。
- 一 改行位置は底本のままとしている。
- 一 傍注は（ ）の有無を底本のとおりとし、該当か所に付した。
- 一 割注は原本のまま記した。
- 一 判読できなかった文字は■で示した。
- 一 校訂者の付記は、所蔵者ごとに、※を文頭に付して記した。

翻刻

【有図第六・前集・上巻二八一・毛利織部広円】

目録

- 越前中納言秀康卿具足 一縮 各図
- 甲冑・頬当・小手・袖・脛楯・脚当・冬下着・白布袴下着
- 小袴・団扇・采幣・摺扇・鞭・太刀・脇差之腰当・馬上沓
- 將軍義持公之太刀 一
- 加藤清正馬蘭之台同柄 各図
- 楠正成画像懷良親王之筆一幅 図
- 防長古器考有図巻第六前集
- 毛利織部源広円家蔵

（中略）

- 太刀 一棒鞘ニ納レ之。
- 国宗ト太刀銘ニ鑄レリ。備前ノ国宗作金子百三十枚ノ本阿弥折紙コレアリ。長二尺四寸一分半。少磨上アリ。此太刀ハ、応永年中 義持將軍ノ世広円先祖吉見能登守弘信畠山尾張守満家ト共ニ幼君義量公ヲ補佐シ、年来忠節ヲ尽スニ付、義持將軍ヨリ拝受ト云伝。今以テ所持ス。但シカサリ等々ニオ井テコレナシ。

（後略）

※吉見氏は石見国鹿足郡の領主。近世に吉川広家次男政春が相続して毛利就頼と改め、大野毛利氏として一門に列した。

【有図第七・前集・上卷三五七・益田越中就祥】

目録

雪下呉服 一 織文図

頼朝公之太刀 一腰 図

並太刀袋

防長古器考有図卷第七前集

益田越中藤原就祥家蔵

雪下呉服 一

右ハ 足利將軍義政公ヨリ先祖越中守兼亮

へ賜ハリ、今ニ至ル迄伝来コレヲ所持ス。此呉

服綾地也。裏地ハ絹也。両面共ニ白地ト見エタ

リ。今見ル所ハ清白ナラス。織紋ハ桐竹ニ藤手

也。左ニ図レ之。

雪下呉服織文之図

(図)

右ニ図スル通也。総テ雪ノ下ノ織物ニハ模様

ニオ井テハ種々有レ之由ニ付テ、右ニ形状ヲ図

セリ。呉服ノ長ケ四尺二寸五分アリ。肩ノユキ

一尺七寸二分有レ之。此内袖幅七寸、身幅縫立一

尺二寸也。袖長ケ一尺六寸五分有レ之。袖口七寸

七分也。摠身ニ薄綿ヲイレタリ。

頼朝公之太刀犬坊太刀ト云。一腰

介高ト銘ヲ鑿レリ。持主ノ名ヲ称シテ太刀ノ

号トスル由。身長サ二尺六寸七分、釰トモニ。中

心六寸七分。身幅ニ細本一寸一分。重子ニモ二分五厘

余有レ之。古エ右大将頼朝公ヨリ工藤左衛門尉

祐経カ子大和守童名犬坊丸へ下シ賜リシ由ナリ。

祐時カ末裔就亮カ先祖石州在国タル次節ニ

家頼トナリ、其比コノ太刀ヲ差出シ、今ニ至迄

就祥家ニ持伝ヘシト也。左ニ図レ之。

頼朝太刀之図

(図)

模様無レ之所ノ金物何レモ無地之琢也。

立浪彫上也。

鞘革包ニシテ、栗色塗也。

目蓋ノ内ニ又丸ヲ設ケシハ、目釘ノ頭也。

柄鮫総黒塗ニテ、ヲヤサメノ頭ヲ五ツトモニ白シ。

(本文)

右太刀ノ制作柄長サ冑ノ金ヨリ縁迄八寸二分

有レ之。冑金ヲ始メ柴引ニ至ルマテ総金ト物赤銅

ト見ヘタリ。今ニ至テハ煮黒目ナトノ様ニ見

フル也。模様立浪ノ彫上也。金具ニ不レ残玉縁ヲ

用ヒタリ。目釘穴ノ所ニ胴金ヲ卷タリ。制作総

金物ニ同シ。幅一寸二分有レ之。是ニ目蓋アリ、金

焼付也。青海浪ノ彫上也。丸形ニシテ、大サ六分

許也。柄鮫塗殺ニテ、柄糸ヲハ不レ用也。

背^レ金ノ金物長サ一寸七分、幅一寸二分許有^レ之。
 目釘水牛ト見エタリ。目釘ヲ差コトサシ表ヨ
 リ差込テ差裏ニテ止ル制作也。目釘ノ頭ハ鋌
 釘ノ如ク丸シ。差裏ニ見フル所ハ釘末角形也。
 是ニ横ニ穴ヲ穿チテ細金ヲ差テ止メタリ。古
 キ新キ制審カナラス。中心ノ目釘穴常ヨリ横
 ニ長シ。下ハ丸ク上ハ角形也。數百年ニ及シ故
 ニ、自然ト右ノ通ナルニヤ。又ハ故アツテ右ノ
 形チニ穿タルニヤ、是亦審ラカニ見分ガタシ。
 鐔丸形ニシテ少シ下太リ也。赤銅ト見ヘタリ。
 制作立浪ノ彫上ケ也。鐔大サ堅二寸九分、横ノ
 太キ所二寸八分許アリ。
 大切羽鐔同様ナル作りニシテ、表裏ニコレア
 リ。堅大サ二寸、横太キ所ニテ一寸八分アリ。世
 ニ是ヲ三枚鐔ト称スト也。小切羽一方ニ三枚
 宛アリ。二枚ハ金焼付真ノ小刻ミニテ、中ノ切
 羽ハ赤銅ニシテ大刻ミ也。
 鞘長サ鞘口ヨリ芝引マテ二尺九寸有^レ之。鞘ヲ
 革包ニシテ栗色塗也。白木ノ上ヲ塗タル如ク
 ニ見エタリ。虫ノ喰タル所少シ有^レ之。此所ヲ見
 シニ右ノ革ヲ被セタリ。鞘形至テ平シ。
 鞘口金物有^レ之。幅二分五厘アリ。一二ノ轄^(アシ) 雨覆^(アマオシ)
 股寄セ金物芝引金物胴金各制作同様也。

一二ノ足幅五分アリ。三ノ責二分五厘。芝引胴
 金二分五厘ノ内有^レ之。
 雨覆金^レ物長サ一尺八分有^レ之。幅七分許アリ。芝
 引長サ六寸、但芝引胴金迄ノ寸也。幅五分許。
 一二ノ轄^(アシ) 取金物座二箇所。共ニ長サ一寸許。
 高サ総金物共ニ六分許有^レ之。
 太刀袋
 表綾白地也。菊桐ノ模様有^レ之。織切ノ所アリ。是
 ニハ模様ヲ不^レ用シテ立筋許有^レ之。其間一尺許
 有^レ之。裏地紫色ノ絹也。紐アリ、真紅四ツ組ナリ。
 大サ印籠ノ緒ホト有^レ之。房長サ五寸許有^レ之。房
 ノ打初メヲ三マタニシテ、其先ヲ房ニ用ヒタ
 リ。袋紐共ニ古キ仕立ト見ヘタリ。
 本文ニ太刀雨覆ノ金物ヲ股ヨセト記ス。尚
 按スルニ、或ハ太刀ノ雨覆ノ金物ヲ股スリ
 ト記シ、或ハ芝引ノ金物ヲ雨ウケナト記セ
 ルアリ。然ルニ股ヨセト云トコロハイツレ
 ヲ云ルト定メシモノイマタ所見アラス。軍
 器考ニ記ス所モ亦左ノ如シ。
 大諸礼ニ、太刀ニモ、ヨセノアルハ武家ノ
 太刀也ト云コトアリ。コレハ東鑑ニ見エシ長
 覆輪ノコトヲ云シニヤ。保元物語ノ異本ニ、鎮
 西八郎為朝ノ太刀ノモ、ヨセニ敵ノ矢ヲ

射留シト云コトアレハ、昔ヨリ武士ノ佩シタ

刀ニハモ、ヨセト云モノハアリシ也。又云

俗ニ云ナル毛抜形目貫、ソラ目貫、露ノ緒、玉

ブリノ、并ニカフトガ子、大セツハ、小セツ

ハ、覆輪、シバ引、モ、ヨセ、イシヅキ、セメ足、足

間、カハサキ、カハノモンナト云ル類ヒノ飾

リ、古ニハ如何ニ名ヅケ云ケム、其文字モ又

詳ナラズ。ヨク知人ニ尋ヌヘキ事也ト云リ。

※益田氏は石見国美濃郡益田の領主であつた。萩藩では代々家老を務めた。

【有図第九・前集・上卷三八三・井原孫左衛門元俊】

目録

輝元公御脇差 一

幕串槍 十本

再拝 一 図

防長古器考有図卷第九前集

井原孫左衛門藤原元俊家藏

御脇差 一腰

出羽直綱作タル由ニテ、無銘也。長サ一尺五寸

五分、鍔マテニテ。鍔金指表上貝ニ一文字ニ三

ツ星彫上ニス。指裏上貝ニハ丸ノ内ニ五七ノ

桐アリ。惣地一金玉祐乗ノ鍔子也。棒鞘ニ此ヲ納

此御脇差ハ先祖伯耆元歳従

輝元公一拝領仰付ラレ、嫡子清吉就俊へ譲与ス。

譲状有之。其ヨリ世々持伝フト云。

(後略)

※井原氏は毛利氏の家臣であつた。脇差の作者出羽直綱は、石見国の刀工の可能性がある。

【有図第十四・前集・上卷四六五・益田図書就白】

目録

南蛮筒鉄炮 一 図

防長古器考有図卷第十四前集

益田図書藤原就白家藏

鉄炮 一

筒総長サ四尺七寸七分、巢口指渡二寸七分、玉

入ノ所分一相九分有之。唐金ヲ以テ制之。

南蛮制作之大筒タル由云伝へ、古来ヨリ所持

ス。然共先祖何某世ヨリ持伝ヘシナト云コトハ

審ラカナラスト也。左ニ図之。

(図、上側の註記)

此所丸ク大サ五分許、厚サ

二分許。中ニ穴ヲ彫貫タリ。

此所形如図。内穴虚

ナル所ノ留リ也。跡先

同前也。

此間形丸シ。

跡先花形ノ間

一尺許アリ。此

所八角ナリ。

(下側の註記)

此金物鉄也。和制ニテハ子^(ま)金ノ所也。

内ヨリ是ヲ見レハ、必捻金共見エス

仕付シ様ニ見フルナリ。長四寸也。

此所鑄留マテハ唐金也。

此所大サ指渡三寸九分アリ。

此穴豎七分横長サ一寸二分。座アリ左右

同前ナリ。

底ニ穴三ツアリ。内一ツハ長サ一寸七分。豎ニ

彫貫タリ。残り二ツノ穴ハ右豎ニ設ケシ穴

左右ニ小タ丸ク彫留ナリ。

此所長サ七寸六分、横指渡三寸八分。左右ノ

線一方ノ厚サ七分五厘。此所内ハ空虚ニテ

底ニモ穴アリ。外ニ有^レ之具欠失タルナルヘシ。

此筋模様也。

此金物八分許。小口モ同前也。此設ハ台ニ

居ル時ノ用ナルヘシ。

前目当ト覺シキ所。前花形ノ本ヨリ

二寸七分余アリ。

此間丸形也。巢口其外如^レ図。

【有図第四十三・前集・上卷九七三・小笠原要人長直】

目錄

矢稟 二筋

鏃 二本

長刀鋒 一振

防長古器考有図卷第四十三前集

小笠原要人源長直家藏

矢稟 二筋

鏃 二本

右ノ矢^(ヤ)幹鏃ハ小笠原家ノ先祖彈正少弼長雄

石州ニ在城也。長雄ハ強弓勢兵ニテ、射残ス所

ノ箭中刺等其支流二分譲シ、今ニ持伝ル所也。

(中略)

(図) 鏃長サ二尺七寸。

筈篋筈。

篋大サ一寸五分廻リ。

中心一尺二寸三分。

長サ五寸。雁股。幅三寸六分。

根多卷一寸八分。

節四ツ。
塗篋ト見エタリ。

(四)

篋長サ二尺五寸三分。

篋大サ一寸六分廻リ。

箬篋箬。

鳥舌形中心二尺二寸。

長サ四寸九分。

根多卷九分。

節三ツ。

拭ヒ篋ト見エタリ。

此所ニテ幅二寸一分余。

(後略)

※小笠原氏は石見国邑智郡川本の領主であつた。

【有図第四十七・前集・上卷一〇二七・口羽六兵衛通顯】

目録

- 甲冑 一領
- 頬当 小手 佩楯 臙当 踏込 夏下着
- 白布 騎馬鞆 刀差
- 母衣 一掛
- 再拜 一
- 陳扇子 一

四半旗 一 図

小旌 一 図

柄絃綺 六

鎗 一本

防長古器考有図卷第四十七 前集

口羽六兵衛大江通顯家蔵

甲冑 一領

五枚冑、黒塗。鞆三段、鉢付ノ板共ニ。一文字頭、簾掛綴也。威絲黒絲也。鉢付板ニ引廻シ付ノ緒アリ、白革也。引廻アリ、俗ニカスヲ鬚ト云ル毛也。

脇立物アリ獸角也。是ニ熊毛ヲ殖タリ。前立物アリ、真鍮ノ輪也。大サ三寸許。冑請裏洪染木綿也。忍ノ緒付三所アリ。此緒萌黄ノ打緒也。忍ノ緒丸クケウ子織也。

頬当猿頬、黒塗也。簾掛三下リ革包。威絲鞆同前。胸桶皮。上下ノアカキ無レ之。胸板ニ朱漆ニテ胸一ハイニ輪ヲ設ケタリ。後ノ方前ニ同シ。合当離待受アリ。惣金具廻リ金粉ニテ覆輪ヲトル。

草摺六間、四下リ緞子包、銀溜也。揺ノ絲紺、簾掛綴也。胸裏黒塗。責小鞆水牛。紐紺平打也。小手総鎖、五本篋。家地洪布。裏白布。手首シメ緒掛緒縁各藍革也。

佩楯四下リ。一文字頭革綴ニシテ、黒塗也。家地

掛緒縁各藍革也。

黒小紋ノ浮織也。家裏白布。総縁藍革ニテ包レ之。
紐紫ノ絹也。

臍当五本篠。鎖ヲ用ヒス五本篠ヲ脚絆ニ綴付

タリ。此綴絲紫ノ組也。角摺ノ所紫革。家地表紺

地縹子、裏地萌黄片色。総縁藍革。紐ハ裏絹同前。

踏込 一

地斤色也。色ハ茶色。裏生^(キビラフ)平布。紐表地同前。

夏下着 一

地白布、梯ト浅黄ノ横筋也。制作袖袖。襟黒縹子

両面也。襟ニ横ニ金絲ノ狭々縁二筋伏セ、間ニ

蔓草ヲ這セ縫ヘリ。襟先ト上襲下襲^(紅)ヘニホタ

ン掛アリ。

白布 一

長八尺五寸許有レ之。此物甲冑法着ニコレヲ用

レハ、血戰ニ及ハン時ノ用意ナルヘシ。右ノ外

沓下ノ足袋並ニ草鞋アリ。鼻紙余分端ヲ綴テ

アリ。刀槍ノ血ヲモ拭^{ヒキハダ}。刀脇差ノ敷文ニ至ル迄

コレアリ。古ヨリ右ニ記ス所ノ甲冑ニ持添来

レル由也。

騎馬鞆^(ユカシ) 一具

表茶革無地。裏斤色也。

刀差 一

表天鷲絨、裏滑シ革栗色塗。

母衣 一掛

五幅五尺七寸。地常ノ絹也。水色ノ絹三幅、紫色

ノ絹二幅ノ幅交也。天井ノ緒七尺幅一寸。右ノ

緒通スヘキ所ノ袋一寸二分。中縁ノ緒長サ二

尺七寸五分、幅一寸二分。幅ニ付所一寸二分有。

縫付様幕ノ乳付様也。左右同前也。浪不立^(ナミダクダ)ノ緒

七尺幅一寸二分。右ノ緒通スヘキ所ノ袋一寸

二分。左右同前也。旋風有。中ノ幅左右ニ明レ之。右

風穴ノ広サ二寸七分。母衣ノ頭ヨリ一尺二寸

三分置テ是ヲ明ル也。裙ノ方五幅。共ニ七寸宛

縫放ス。縵ヲ掛タル時ニ、風ノ吹貫テ重カラヌ

設ケ也。同裙ノ所縫放セシ通ヨリ五幅、共ニ各

友絲ヲ以テ十文字ニ是ヲ指縫エリ。其大サ一

寸二分許。縵縫様伏縫ニシテ針数ヲハ不^レ用シ

テ小針ニ是ヲ縫ヘリ。左右ノ縁ヲハ折返サズ

其儘ニ、絹ノ耳ヲ用ヒテ小針ニ指縫エリ。母衣

串アリ、鯨ノハグキ也。鎧ノ合当離工差ヘキ設

ニシテ、疊母衣串也。制作異ナル事無^レ之。

再拜 一

串ノ長サ一尺、丸形也。上下ノ逆輪銀四分一也。

花形猪ノ目アリ。再拜緒通シ穴腕貫穴鴨目銀。

幣付ノ粒子白地金入ノ織物ニテ包メリ。再

拜紙白シ。長サ九寸四分。数ヲハコレヲ正サス。

幅四分アリ。采幣付ノ緒杉立菖蒲草、幅五分。粒

子ノ方ニモ此革ヲ丸緘ニシテ用レ之。再拜ノ緒

結ヒ余劍先也。風帯ノ遺制也。腕貫緒紅井四ツ組、太

サ常ノ羽織ノ紐ノ如シ。結ヒ立タル所六寸五

分許。結ヒ形鞭結ヒ也。房ノ長サ三寸許アリ。

陳扇子 一本

十二本立竹骨也。平骨白シ。上ノ方一方ニ乾ノ

卦二通り、一方ニ坤ノ卦二通、何レモ彫透シナリ。

其ヨリ下ニ猫間透シアリ。左右同前。中骨十本

ハ朱骨黒骨一本交ナリ。地紙ハ一方金溜ニシ

テ朱ノ丸アリ。大サ五寸。一方ハ朱漆ニシテ金

箔ヲ以テ丸ヲ設ケタリ。大サ右同前。腕貫穴鴉

目銀小刻三枚座。腕貫緒紅井四ツ組。結ヒ立タ

ル所四寸五分。房二寸許。結ヒ形鞭結ヒ也。扇長

サ一尺二寸。地紙高サ七寸アリ。

四半旗

旌地常ノ絹、紺色也。二幅ニテ堅三尺三寸二分、

横二尺三寸二分アリ。中通リニ横ニ金箔ニテ

筋二通アリ、此幅六寸八分。右ノ金筋紙ヲ箔溜

漆置ニシテ両面ニ綴付タリ。下ノ筋ニ黒キ丸

三ツアリ。大サ四寸七分アリ。即チ口羽家ノ紋

ニ文字ニ三星ノ意ナルヘシ。上ノ金筋乳際ニ

高麗渡海印ト記セリ。二字許下ケテ其ヨリ左

リヘ寄セテ天正十九年ト記セリ。同下ノ金筋

乳際ニ口羽姓六兵衛尉元可ト記シヌ。口羽姓

ト六兵衛トノ間ニ闕字ヲ置ケリ。右四半ノ乳

頭ノ方ニ八ツアリ、脇ノ方ニ十二アリ。幅七分、

長サ一寸五分。絹ニ付所五分許。縫様幕ノ乳ニ

等シ、金溜也。総地ヲ十文字ニ絲ニテコレヲ指。

金溜ノ所共ニ同前。猶後ニ図スルカ如シ。

小旌

右指物ナルニヤ、長サ五尺五寸。地紺染ノ絹也。

乳ヲ不レ用シテ袋縫也。金紙ニテ間相ヲ配リテ、

大サ六寸九分ノコク餅ヲ三ツ付タリ。下ニア

ル所ノ丸ノ内ニ、右ノ方ニ寄セテ慶長八年ト

記レ之。又其ヨリ左ヘ寄セテ口羽姓六兵衛尉元

可ト年号ヨリ姓名ヲ細字ニ記シヌ。闕字ヲ置

コト四半ニ同シ。是又後ニ図レ之。

柄紋綺 六

地白絹。梯色ノ木綿ニテ縁ヲトレリ。此所へ柄

ツルヲ通スヘキ設ケ也。下ノ留リニ白革ヲ付

タリ。絹ノ長サ一尺五寸、幅六寸五分アリ。横ニ

ナヒケテ筋ヲ画ケリ。幅二寸六分許アリ。俗ニ

是ヲ左卷ト称セリ。此筋ヲ法ノ如ク墨ニテ付

侍リヌ。故ニ墨所々ニニジミ有レ之。制作異ナル

事ナシ。御家ニ其一隊ニ御用ヒアリケル由ノ

柄紵ノ制作トハ替レリ。此家二八九十年來持
伝フル由ニテ、コレヲ考フレハ右ニ記ス所ノ

柄弦ヲモ用ヒタマヘルニヤ。又ハ私ノ物数奇

ナルニヤ、審ラカナルコトヲシラス。尚按スルニ
紺ノ吹貫ノ

差物アリ。吹貫輪ヲ通スヘキ所ノ左右ニ
正平革ヲツケタリ。至テ古ク見エタリ。

鎗 一本

長サ七寸二分アリ。形チ三角。祐定ト銘セリ。柄

総黒塗。塩首朱。制作異ナルコトナシ。鉄花石突ノ

外一切金具ヲ不_レ用制作也。

右巻頭ニ記ス所ノ甲冑ハ、通頭先祖口羽刑部

太輔通良初陳ノ時着用スル甲冑ナリト。通頭

元祖元可ハ通良三男タルニ由テ、天正十壬午

ノ歳ニ讓与スト云。元可十六歳ノ時兄口羽春

良中務大輔家
断絶タル由ト同道高麗渡海彼地ニ於テ高

名シ働ノコトハ、元春・隆景ノ両君見届賜ヘル

由。右ノ軍器元可以來今以テ伝持スル所ナリ

ト云。

四半旗之図

(図)

総紺染絹二幅也。糸ニテ十文字ニ指。

此所二前ニ著ス趣ヲ記。

此筋金紙漆付糸ニテ十文字ニ指。

此所ニ姓名ヲ記。

此筋金紙糸ニテ十文字ニ指。

乳華金タミ也。此外前ニ如_レ記。

小旌之図

(図)

竿横手ヲ指所。

地紺染一幅也。

此所ニ竿ヲ指。袋縫也。

金紙漆付糸ニテ綴付様

如_レ図。三所共ニ同前也。表

裏各図ノ如シ。

此丸ノ内エ本文ニ記ス如ク、年号

姓名等ヲシルス。

此所黒革也。

此所ニ緒ヲツケリ。竿ニ留ル設ナルヘシ。

※口羽氏は石見国邑智郡口羽の領主であった。毛利元就は家臣志道

通良に口羽氏を継がせた。

【有図第五十八・前集・中卷一二五・下瀬七兵衛頼紀】

目録

朝鮮轡 一口 図

鎌 十一 図

刀 一腰

防長古器考有図卷第五十八 前集

下瀬七兵衛源頼紀家蔵

朝鮮轡 一口

慶長二年朝鮮征伐ノ時、

輝元公旗下吉見大蔵太輔広行ニ属シ、朝鮮渡

海合戦ノ時先祖七兵衛頼直同シク渡海軍功

ニ依テ広行ヨリ賞与ノ由。左ニ図レ之。

(図)

承鞞蛇口引手等常ニ替ル事ナシ。

此所幅八分五厘。坪ノ所図ノ如シ。左右同前。

差渡一寸二分。両輪共ニ本邦ノ立聞ノ輪ト見エタリ。

嚙先総差渡三寸八分五厘、切込五分、切レ口ハ、二分。

此所一寸二分、坪共ニ。

輪差渡三寸六分。

此所一寸一分。横幅六分。厚サ三分五厘。

左右同。

坪ヨリ坪マテ二寸六分。厚サ一分半。

此輪一寸二分。左右同前。

鏃之図

(図)

劍形。又ノ名鷹ノ羽共。

長サ六寸二分。幅一寸一分。

中心一尺八寸。

形右同。

長サ中心共ニ右同寸。

(図)

中心八寸。長サ四寸。幅一寸九分。

中心一尺。長サ四寸五分。幅二寸一分。

鏃ニツ共ニ鳥ノ舌形ノ太キ制ナルヘシ。

(図)

中心五寸。形雁股。長サ二寸三分。幅一寸六分。

中心五寸。形寸共ニ右同。

(図)

中心九寸四分。形名透シ雁股ナルヘシ。

長サ二寸四分。幅一寸五分。

中心五寸六分。桜透。長サ二寸五分。幅一寸四分。

(本文)

左ニ図スル鏃寸等替ルコトナシ。故ニ略レ之。

(図)

龍舌

椎形筆形共。

(本文)

右図スル所ノ鏃異ナル品コレナキ類ヒモコレアリ。誠ニ小家ノ者二百余年持伝タル由ニ

付、悉ク図レ之。

右下瀬加賀守頼定ハ当七兵衛頼紀先祖ニテ、

弘治年中ノ者也。即チ彼カ射残ス所ノ鏃ナリ

ト云。

刀 一腰

無銘。長サ二尺九寸。身幅一寸三分。中心九寸五分有^レ之。

右下瀬加賀守頼豊所持スル刀也トソ。頼豊ハ

長祿年中ノ者ニテ、明和年中迄三百余ケ年以

前ノ者也ト云。

※下瀬氏は、石見国鹿足郡の領主吉見氏の有力家臣であった。

【有図第六十三・前集・中卷一八七・赤木太郎左衛門忠雄】

目錄

鍬 二

右 赤木太郎左衛門源忠雄

(中略)

防長古器考有図卷第六十三 前集

赤木太郎左衛門源忠雄家蔵

鍬 二

忠雄先祖上領三郎頼春^{後改豊後守}力量拔群ニシテ強^{シテ}

弓大箭ヲ好。此鍬即チ頼春所持也。頼春力量ハ

石州釣鐘ノ城ニテ大石ヲ以テ名ヲ顕ス。福屋

太郎是ヲ聞及ヒ以^レ書札^一称^二誉^一之。其書居宅火災

ノトキ^(トキ)燒失。其写今以所持スル由。^{頼春ハ応永ノ比ヨリ寛正年中迄存生ス。}

(図)

長サ三寸五分。雁股。幅二寸二分余。

中心一尺四寸九分。

長サ三寸一分五厘。鳥舌。幅一寸四分。

中心四寸九分。

(後略)

※上領氏は、石見国鹿足郡の領主吉見氏の有力家臣であった。

無図五

【無図第五・前集・下卷四一・益田源兵衛就応】

目錄

太閤秀吉公之鞍 一脊

晝具足 一領

狸々敷革 一枚

防長古器考無図卷第五 前集

益田源兵衛藤原就応家蔵

鞍 一背

黒鞍ニ菊水ノ高蒔絵有^レ之、金粉也。鞍前後ノ内

ニモ同様ノ蒔絵有^レ之。内ノ方ノ蒔絵ハマバラ

也。内蒔絵ハ銀粉ヲ取合セタリ。

居木裏ニ明応四年八月十三ト彫^レ之。鞍切組ノ

内ニハ判形コレアツテ、同是ヲ彫レリ。外ニ居

木裏左右共ニ書判有^レ之。按ニ、蒔絵師ノ判ナト

ニテハ無^レ之ニヤト考ヘラル。此等ノ儀ハ云伝

へトテモ無^レ之由也。損シモ無^レ之。至テ古クシテ殊勝ニ見フル也。

右益田牛庵從^ニ 秀吉公一^下シ給リ。朝鮮ヘモ

持參有^レ之由也。其後就応カ先祖牛庵ヨリ譲リ

ヲ得、今ニ至リ持伝フル由也。

疊具足 一領

鉢疊冑。惣黒塗、スガケ縫、紫糸也。鞆五段。制作上

ニ同シ。見上光明朱。前立物銀ノ宝珠也。浮張紺

木綿、千重指。忍ノ緒付締三所、紫平打。忍ノ緒白

布。頬当猿頬。スガ四下リ。制作鞆ト同前也。外黒

塗内朱塗也。

胴疊冑。板金ノ間々鎖綴。綿嚙三枚ニシテ間鎖

綴。襟小手蔵ハ小鱗ナリ。▽天鷲絨。菱縫紅糸、這セ糸金絲

也。襟裏小手蔵裏共ニ赤地金入也。胸板望光ノ

板左右ノ脇下ノ惣縁何レモ金サ、縁ヲ取レ

リ。胴裏花色布也。

綿嚙ノ相引緒掛通シニシテ、紫平打也。

草摺七間五下リ、碁石頭、黒塗也。簾掛縫紺糸也。

受緒掛緒紫平打、責鞆水牛也。

小手惣鎖ニシテ、小篠肘金等アリ。制作替レル

事ナシ。家地萌黄地金入也。

置袖無^レ之。

佩楯惣鎖。小篠膝金アリ。家地小手同前也。紐小

紋純子茶色。惣縁金サ、縁ヲ取レリ。

臙当八本篠鎖綴、十王臙当。制作襟小鱗ニ同シ。

家地右同前也。

右制作異成事無^レ之。惣鎖南蛮鎖タル由ヲ、代々

伝来スト云ヘリ。

猩々敷革 一枚

表赤革也。裏モ赤色ニテ色薄シ。表裏共ニ染色

悪シ。豎二尺六寸余、横二尺余有^レ之。角形也。四方

ノハシニ張跡有^レ之。

右ノ革ヲ古ヘ関東ニテ目利スル者ニ見セシ

ニ、未見及ハヌ革タル由ヲ云ヘルトソ。代々猩

々敷革ト云伝ヘシト也。

【無図第七・前集・下卷五五・口羽又兵衛通規】

目録

輝元公御脇差 一

源氏物語男女装束抄 一

刀大和尻掛則長作 一

鎧 一領

冑 畠山重忠所被云 一 勿

頬当 一

甲冑 一領

防長古器考無図卷第七 前集

口羽又兵衛大江通規家蔵

御脇差 一腰

銘ヲ相州住秋広卜鑄レリ。差裏ニ治三年六月十八日卜鑄レリ。治ノ字ノ上ニ今一字有レ之ト考ラル。目釘穴ヲ三箇所ニ穿テリ。此所ニテ字減セルト見エタリ。身長サ一尺四寸二分余有レ之。中心長サ二寸一分余有レ之。幅一寸一分許有。差表ニ劍独鉦ヲ鑄レリ。切先ヨリ五寸三分許ヲキ、劍形ヲ鉦本迄鑄レリ。差裏ニハアマ龍ニ香箸樋、其下ニ梵字ヲ鑄レリ。此アマ龍切先ヨリ三寸許ヲキ鉦本へ鑄レリ。此御脇差從_二輝元公_一先祖中務太輔春良拜_二領之_一右御脇差ニ御書ヲ被_レ下。右御文章左ニ記_レ之。

返々、此者事別而心安召仕候間、令進之候、為御心得候_レ、

彼条之儀、重畳申様ニ誠ニ御請付なく候共、御方父子之儀ハはたと内外共ニ頼申儀候間、一答ニ申候処、則御請付あり、御拵なりかたき所を被仰拵、如此候時ハ、更御方父子之御懇志御馳走之所中々非限言語候、更御懇志之所、ほうし候事ハ成間敷候間、連々無忘却所か、我々か御届まで候、悉皆悻家之所、父子して御取立被相續まで候、我々ハ不及申候、洞春・常栄

江之御届不及申候、うちニハ定而不及是非、機嫌

たるへく候、いまた不申候、御方父子之おん重畳ふか_レとうけ申候、其段心中はかりには毛頭無忘却候、更々無申事候、仍通良之事ハ不及申候、御方此間御心遣不及沙汰候、祝儀はかりに一腰進之候、誠ニ心悦まで候_レ、猶吉事無尽期々可申承候、恐々謹言、

正月廿一日 輝元 御判

「 少

中太參 てる元」

右ノ御書折紙也。

(中略)

刀 一腰

大和尻掛則長作タリトソ。

右通規カ先祖通良所持セシ由也。鉄精_(サシ)ナト拭

ヒシ時ニ色々不思議有_レ之由ヲ云伝タルト也。

故ヲ以テ先祖以来今以テ深ク秘蔵スルノ由ナリ。

鎧 一領

桶皮胴。中札。黒塗ニテ、スカケ綴。紺糸威也。

草摺七間五下り。中札。スカケ縫也。威糸右同前。

綿嚙板黒塗。相引緒紺也。襟八幡黒革。違縫亀甲

這七糸有_レ之。襟裏金入也。小鱗小札綴糸右同前。

小手鎖綴也。制作異成事^(註)無之。

中袖頭小札也。冠板共二七段。毛引糸紅白萌黃

三色ナリ。畦目啄木有。違縫一通有、紅糸也。

佩楯制作異成事^(註)無^(註)之。家地花色緞子、萌黃糸牡

丹唐草浮織アリ。裏地洪布也。

臙当七本篠、惣鎖綴。十王臙当。角摺^(カク)各茶革也。

右ノ鎧先祖以來持伝フル由也。乳繩常式ヨリ

大也。三尺二寸余有^(レ)之。

胄 一劔

片白。金鉄精色。筋二十二間有^(レ)之。金焼付也。篠^(垂)

二真ノ小刻ノ座一重有^(レ)之、金焼付也。

八幡座五重アリ。上玉ハ座ノ外也。金焼付白檀

塗四分一^(レ)一段宛、各透菊濃菊也。

高勝^(高唱)共ノ鑽金焼付也。

引廻付ノ目同緒通ノ穴有^(レ)之。座小刻也。四ヶ所

各同前也。

眉庇覆輪、無地ノ金焼付。三光ノ鋌有^(レ)之。八重菊

金焼付也。此ヲ大紋革ニテ包^(レ)之、黒塗也。見上ノ

内革包、栗色也。此革堅筋幅一分余有^(レ)之ヲ並テ、

横ニ同シ革ニテ綴付シ如クニ見フル。即毛引

綴之仕方也。革ノ離シ所ヲ見シニ、右ノ模様ニ

制作セシ革ナリ。故ニ革裏ハ無地也。何革成ニ

ヤ未^(レ)考。

請裏布重子輪刺、紺染也。緑藍革。忍ノ緒付締三
所有^(レ)之。紺唐打也。

鞆五下り、鉢付板共ニ。一文字頭。毛引糸。吹返大

振ニテ、覆輪無^(レ)之。紅糸違縫、畦目啄木有^(レ)之。

前立ノ角本有^(レ)之。折釘許也。

類当 一

面類。鼻掛外シ。スガ四下り。頭小札。毛引糸紺。内

外共ニ黒塗也。制作至テ古ク見フル也。

右胄類当二品共ニ畠山庄司二郎重忠所持ノ

物也ト云ヒ伝フル由也。如何成子細ヲ以テ持

来レルト云ル事モ詳ニ難^(レ)知。伝来而已也トイ

ヘトモ古制成由世々云伝フルト云ヘリ。按ニ制

作形^(下モ)上別テ上品ニ見エタリ。

甲胄 一領

胄頭形、筋六十二間。鞆五段、鉢付板共ニ。一文字

頭。惣黒塗。威糸紺。スガケ縫也。眉庇ニ縋有^(レ)之。

見上光明朱。八幡座影向穴上玉有^(レ)之。透菊濃菊

取合四段也。制作異成事^(註)無^(註)之。吹返紋所劍酸漿

ヲ金粉ニテ居ケリ。鉢付鋌金焼付也。菊座アリ。

請張紺布、千重刺。忍ノ緒付締三所アリ、藍革ナリ。

請張縁共ニ藍革也。忍ノ緒紺布、花色染也。

前立物向兔也。耳長サ一方一尺四寸三分アリ。

惣銀箔濃也。兎ハ少々^(少)耳ハ長シ。

類当制作三齋流ノ猿類ト見エタリ。外金縮色、内黒塗也。面ニ横筋ヲ設ケタリ。スガ四下リ。一文字頭。簾掛縫。綴糸萌黄色ナリ。

桐桶皮、中札、黒塗、鋳綴也。草摺六間五下リ。スガケ綴也。裙ノ板熊毛、札黒塗也。

襟黒羅紗。違綴亀甲這セ糸共ニ萌黄色也。襟裏黒襦子ト見エタリ。損失難ニ見分^一。

綿嚙制作異成事ナシ。小鱗ノ制作襟ニ同シ。

胸板望光ノ板ニ金粉ニテ蒔絵唐草有^レ之。惣廻

金粉鑄掛也。左右ノ脇下朱漆塗。合当離^{後ノ世}ノ物故

^{二文字}モ不詳。請筒ノ根直敷^(チヌシ)上ニ黒塗。此外異ナル

事無^レ之。胴裏革黒塗也。

胴草摺ニ至ルマテ黒塗、砂塗也。責鞆白角。

小手惣鎖。小篠取合セタリ。置袖仕付也。冠ノ板

共ニ五段。中札、白糸毛引綴也。塗様胴ニ同シ。家

地黒襦子。家裏洪布也。

踏込脛楯、鎖綴也。鎖ヲ金ダミニシテ、家地裏地

小手同前也。惣縁藍革也。紐絹花色形付也。此外

制作異ナル事無^レ之。

臈当七本篠、鎖綴。縁勝負革。鉸具摺黒革也。

右福原家先祖出羽守貞俊甲冑タル由也。趣有^レ

之口羽家ニ伝来セシト云リ。

【無図第十・後集・下巻一〇五・益田富五郎就雄】

目録

太刀 一腰

唐鞍 一脊

防長古器考無図巻第十 後集

益田富五郎藤原就雄家藏

太刀 一腰

棒鞘ニ納ル。太刀銘ニ高包ト鑄レリ。身長サニ

尺七寸三分。中心六寸三分。目釘穴ニツ鑄レリ。

元曆康和建保ノ比ニ高包ト銘スル鍛冶コレ

アル由。

唐鞍 一脊

■栗色ニシテ、青貝ニテ前後山形ニ尾長鳥ヲ

二羽宛青貝ニテ居^レ之。梅鉢ノ如キ紋ニ唐草ト

リ合セ、アト輪モ同シク桔梗ノ如キ紋ニ唐草

ヲ青貝ニテコレヲ置ク。前後ノ輪内ノ方捻桔

梗ノ如キ紋ニ唐草ノ模様コレアリ。是又青貝

ナリ。前後ノ輪一方三所宛革ニテ綴タリ。

前後輪頭ノ縁ニ青貝ニテ折入ノ模様アリ。

居木栗色ニシテ唐草青貝也。居木ノ制作和鞍

ニ同シ。

前輪高クシテ後輪ナソヘニ早クシ、最モ鞍坪

和制ヨリヒロシ。

前後ノ輪居木雉子股^(トモ)トモニ花輪違ノ如キ模様ヲ青貝ニテヲケリ。

前後ノスハマニハ花亀甲ヲ総ニ青貝ニテ模様ヲナセリ。最モ総布キセ。

前輪スワマノ中ニ座アル鑲コレアリ。鑲ノ寸各一寸余。前ノ居木先ニ鑲三ツ有^レ之。制作スハマニツケル鑲ニ同シ。但シ脊ノ方ヘニツ並ヘ、下ノ方ヘ一ツコレアリ。

アト輪ノ居木先ニ脊ノ方ニ鑲ニツ並ヘ、下ノ方ヘニツ並ヘウテリ。総テ鑲真鍮ト見エタリ。

前後居木居木先ニ五分宛ホト間ヲヲキ、丸キ鋌頭ノ如キ青貝ヲヲケリ。

総テ鞍ノ裏ヨリ見レハ、前後ノ輪ヲ数多トコロ革ニテ綴着タリ。此外ノ鞍具コレナシ。

右ノ両品就雄先祖以来持伝フルノ由也。

【無図第十八・前集・下卷一七七・祖式数馬正美】

目録

御甲冑 一領

御冑

胴

片鎌槍 一本

防長古器考無図卷第十八 前集

祖式数馬源正美家蔵

御甲冑 一領

右先祖次郎右衛門元勝工從ニ

輝元公一拝領被^ニ仰付一、代々持伝フル由也。雖^レ然如何様ノ趣ニテ下シ給リタルト云ル証拠等ノ申伝無^レ之トソ。

御冑

右頭形、一枚鉢打延、黒塗。鞆鉢付共ニ三段。違縫ノ板熊毛。吹返ニ紋数所^(有)アリ。五七ノ桐ヲ金粉ニテ置リ。立物無^レ之。後立ノ真本アリ。頰当アリ。各制作異成事^(有)ナシ。

胴

右桶輪胴、緞子包、黒塗。前後ノ蹠キ無^レ之。左右ノ脇下ニ菊桐ノ御紋有^レ之。合当離待請ウケ筒^(トモ)トモ

ニ菊桐ノ御紋有^レ之。弦走ノ所ニ羽団^(ハダシ)ヲ青貝ニテ置リ。柄アリ羽ノ廻リ其外共ニ金粉ニテ色

繪アリ。惣金具廻リ金粉沃カケアリ。草摺六間。内二間ハ緞子包、金溜四段下リ、一文字頭。違縫

板熊毛、紺糸威也。残ル四間モ一文字頭、黒塗、裙板熊毛、威糸萌葱惣毛引也。此四間ハ後世ニ至

テ仕足セシ物也。籠手ニモ手首ニモ五七ノ桐アリ。置袖頭小実、紺糸威也。佩楯板佩楯、五段。裙熊毛。惣家地茶色ノ純子。臙当七本篠。右何モ制作

異ナル事ナシ。故ニ図ヲハ略シヌ。

片鎌鎗 一本

中心銘下坂作ト鑄物ス。

右次郎右衛門元勝朝鮮御陣ノ御供被^ニ仰付^一。其

節朝鮮ノ湊ニテ働キ有^レ之。水際ニテ右ノ片鎌

ヲ以テ朝鮮人ノ首ヲ搔落シ、水中ニ流ル、所^所

ヲ元勝カ下人竹内六藏ト云ル者游付テ取タ

ル由申伝ヘシトソ。

※祖式氏は石見国邑智郡祖式の領主であった。

【無図第三十三・前集・下卷二九五・佐波勘兵衛嘉連】

目録

(中略)

劍 一並包丁 一

字佐八幡神号 一枚

右 佐波勘兵衛三善嘉連

(中略)

防長古器考無図卷第三十三 前集

(中略)

佐波勘兵衛門三善嘉連家蔵

包丁 一

身長サ一尺五分有^レ之。中心三寸一分。平打丸ム

子也。差裏ニ双方ヘ寄セテ鑄ヲ付ル。無銘也。鎌

倉五郎入道作タル由ヲ云伝フルトソ。

右京都ニ萬昌寺^{詳字不}ト云ル寺ノ門番ノ禪門

右ノ包丁ヲ所持シテ、常ニ包丁ノ代リニモ用

ヒシ故ニ、包丁ト名付シ由也。此包丁ニ付テハ

不思議依^レ有^レ之、嘉連カ先祖淨藏貴所求得テ、今

ニ至ルマテ代々伝来セシト云リ。右ニ記ス所

書伝ノ正説雖^レ無^レ之、往古ヨリ演説セシ所ヲ書

記而已也。

劍

身長サ八寸七分。中心三寸五分。表裏ニ樋ヲ突

ケリ。銘ヲ国永ト鑄レリ。

右之劍モ淨藏貴所以来持伝テ、代々什物トセ

シ由也。二通ノ打物古鞘ニ納テ有^レ之。

字佐八幡神号 一枚

南無八幡大菩薩ノ七字ヲ鳥子紙ニ板行ニ摺

レリ。右ノ神号前ニ記ス所ノ包丁ト劍ニ添テ

有^レ之。如何ナル由緒[■]シレスト云。

(後略)

※佐波氏は石見国邑智郡佐波郷の領主であった。

【無図第三十四・前集・下卷三三五・上領道慶源智定】

目録

(中略)

長刀 一振

右 上領道慶源智定

(中略)

防長古器考無図卷第三十四 前集

(中略)

上領道慶源智定家藏

長刀 一振

身長サ一尺五寸。無銘。両血漕也。

右吉見大藏太輔広行ヨリ給タル由ニテ、先祖

以來持伝フルト云リ。制作異ナル事ナシ。

(後略)

※上領氏は、石見国鹿足郡の領主吉見氏の有力家臣であった。

【無図第三十五・後集・下卷三七九・出羽次郎兵衛祐寿】

目録

鞆之蓋 一

刀 一腰

甲冑 一領

面頬 小手 大袖 板佩楯 脚胼

防長古器考無図卷第三十五 後集

出羽次郎兵衛伴祐寿家藏

鞆之蓋 一

出羽孫四郎元俱君石州出羽二ツ山へ移城シ

タマフ其節ノ具タル由。今ニライテ此蓋ハカ

リコレ有ヨシ。革黒塗。長サ一尺一寸二分。上ノ

脹ラミ三寸二分。下ノ脹ミ四寸六分。金箔ヲ以

テ一ニ三星ヲツケタリ。一ノ横二寸。下ノ並ヘ

ル星ノ横幅二寸九分アリ。

刀 一腰

無銘。二尺四寸。樋表裏ニアリ、中心切先横手際

マテ通レリ。中心五寸九分。鉦モトニテ幅一寸

一分。二重 金、差表落松葉透シ彫、差裏葛ノ葉

ヲ彫透セリ。鉦柄白鮫。カケ茶色ノ革ニテ菱ト

リニス。頭ヲ貫通シ。目貫赤銅。巴金ノウツボ九

曜。縁頭栗形裏瓦返リ角鐺リ金各鉄。ウツボ九

曜ノ金象眼也。鍔鉄スカシ。覆輪赤銅也。

鞘栗色塗ニシテ、斜メニ一筋高く、一筋早く刻

メリ。鯉口角、黒塗。

右祐寿先祖民部大輔祐盛吉川伊豆守之経ノ

聲タルトキ、聲入引出物トシテ出サレタルヲ

所持スルノ由。

刀 一腰

銘貞綱。二尺三寸五分。

甲冑 一領

冑五枚置手拭形、金精色。眉庇付下シ、内朱。脇立

柅木、長サ一尺二寸許。薄板ニテ制シ、黒塗ナリ。

鞆五段、鉢付共二。一文字頭。鉢付ノ板吹返シ、黒塗。綴糸黒シ。日根野形。表裏黒塗。鉢付ノ鍔四所、赤銅。忍緒三所付、黒糸唐打。請張木綿淺黄、マハ^(周)リザシ^(差)。眉庇見上ノ交八幡黒革ニテ縁ヲトレ^(り)。忍緒木綿白クケ紐也。

面頬 一

鼻掛外シ。金縮色。裏朱。ウエヒゲカスヲ^(楯髭)。縮便ノ金汗流^(カ)ノ穴アリ。カケ緒平打。スカ損シテ三段有^(レ)之。制作鞆同前。

胴

桶カハ、蝶番ヒ。胸板望光ノ板左右ノ脇下総梨子地。胸金物ヲメリ金沃掛也。前胸板共二九段。一ノ板一文字頭。二ノ板ヨリハツナギ山道形ノ如シ。総鍔綴。金縮色。脇下青白黒ノ啄木糸ヲ以テ綴タリ。三ノ板右脇ニ高紐二筋、長サ一尺許、黒糸平打也。前後草摺六間五下り、碁石頭、金白檀塗。四通堅ニ黒糸ヲ以テ綴ル。^(スガケトチ也)下散熊ノ皮包、裏黒塗。

胴後望光ノ板共二十段。制作前ニ同シ。高紐アリ。綿嚙黒塗。襟金廻り金粉沃掛。綿嚙カケ通シ。責鞆黒角。カケ通シノ糸紫キ唐打。望光ノ板ニ掛通シ猪ノ目アリ、赤銅菊座也。襟小鱗天鷲絨、亀甲菱縫這セ糸茶糸也。裏洪布。胴裏革包、黒

塗。合当離待請子^(ミ)スシ黒塗。請筒四角、黒塗金粉唐草、小口銅ニテ包ム。繰シメノ鍔赤銅。同締アリ。

小手 左右

小袖仕付小手也。冠リノ板共二六段、頭小札、黒糸威シ。小手家地黒縹子。鎖リ十文字。篠五本。手甲指金共二黒塗。肱金菊、黒塗。裏ノカ、リ糸茶色。縁リ八幡黒革。裏洪布。手甲ノ裏革黒塗。左右同シ。

大袖左方 一

冠ノ板黒塗。交粧ノ板杉立菖蒲革包。三所二丸ノ内二三五ノ桐地七々子ナルヲ居タリ。水引二筋、赤白也。冠ノ板共二八段、頭小札、黒糸綴。肩摺ノ板菱縫二通り、但シ紫キ糸。冠ノ板ヨリ四段目ノ板ニ水飲ノ鍔有^(レ)之。鍔頭ラ丸ノ内ニ三五ノ桐、地納子^(ナナゴ)。金物総テ金焼付。水飲ノ緒黒糸唐打。袖裏総黒塗。交粧ノ板裏左右ニ懸緒ノ鍔アリ、金焼付。一方ニ懸緒黒糸唐打ヲ着タリ。一方ハ落失タリ。同ク中ニ志加ノ鍔アリ。制作左右ニ同ジ。シツカノ緒今ニヲイテ無^(レ)之。

板佩楯

一文字頭、四段。鍔綴、中一通宛革綴。家地黒縹子

ト見フル。損シテ審ラカナラス。総縁八幡黒革。裏渋布。紐其外損シテ知難シ。

臍当

六本篠、鎖り綴、黒塗。裏ナシ。其外損セリ。

右甲冑刀ハ祐寿先祖民部太輔元実以来持伝

フルノ由也。

※出羽氏は石見国邑智郡出羽郷の領主であった。

【無図第四十七・前集・下巻四八九・萩古萩山三千坊】

目録

聖徳太子十六歳木像 一 躰

二歳南無仏木像 一 躰

観音木像 一 躰

達磨木像 一 躰

額 吉見正頼筆 一

防長古器考無図巻第四十七 前集

萩古萩山三千坊恵潮庫蔵

(中略)

額板 一枚

右横額ニ耕作守護所ト大字ニ記シテ、左ノ端

ニ政頼書ト記レ之セリ。額高サ一尺二寸五分、外

法額耳共ニ。内法九寸七分有レ之。横幅二尺八寸、

外法額耳共ニ。内法二尺五寸七分有レ之。耳幅一

寸五分也。四方ノ縁彫上ケ菊唐草金箔溜也。額

耳総ハ栗色塗也。額板下地ハ緑青^(ロウ)地ト見ヘタ

リ。古立テ審ラカニ見分難シ。耕作守護所ノ五

字ヲハ彫上、金箔溜ニシテ横ニ一字宛並ヘリ。

政頼書ノ三字モ同ク彫上金箔溜也。額ノ裏ヲ

見シニ松板ト見ヘタリ。

此板額吉見大蔵大輔政頼直筆タル由也。

(後略)

※吉見政頼は十五世紀後半の、同正頼は十六世紀後半の吉見氏当主である。

(島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員)

収蔵資料紹介：『森英恵流行通信』

廣田 理紗

『森英恵流行通信』は、1966年に創刊されたファッション情報誌である。世界の最新コレクションやデザイナー、ファッションの動向に深く切り込む特集記事で知られた雑誌『流行通信』の先駆けである。発行はファッションハウス森英恵で、当初は全国の森英恵の店に置かれ、月三回の発行、市販はされない、8ページの新聞形式の読み物であった。ハナエ・モリブランドの広告や情報に加え、「日本繊維新聞」と提携し、世界のファッションニュースを写真付きでいち早く伝えた。『森英恵流行通信』という名での発行はわずか3年間という短い期間¹であったが、刊行された全63号では、後の『流行通信』へと続く特集主義が基礎付けられ、様々なユニークな記事も散見される。ここではそのうちいくつかを紹介しながら『森英恵流行通信』を見渡してみたい。鳥根県立石見美術館では、創刊号から19・60・62・63号を除く全ての号を所蔵している。以下それらを3期に分けて紹介するが、まずはこの情報誌が創刊された当時の森英恵を取り巻く状況について少し整理したい。

1966年頃の森英恵

森は1951年に新宿に自身の店を開いて以降、1950年代から60年代にかけては数多くの日本映画で衣装を手がけ、日活、松竹、東宝、東映…と飛び回るように働いた。テレビが普及する以前の日本では映画や新聞の影響力が強く、森は銀幕を通じて流行を発信していたと言える。映画の衣装は「シネ・モード」と呼ばれ、一般の人々はその着こなしを参考におしゃれにいそしんだ。この当時の仕事をきっかけに森の顧客となった映画スターも多い。映画衣装の仕事のほか、顧客から注文をとり、一人一人に合わせた衣装の製作、年に二回のコレクション発表、ショーの開催、さらに『装苑』や『若い女性』といった服飾雑誌にもデザインや記事を提供するなど、1950年代後半から1960年代前半にかけての森は多忙を極めていた。そのため一時は体調を崩し、服づくりへの意欲も失いかけたが、一念発起して旅立ったパリ、アメリカへの旅行で刺激を受け、意欲を取り戻す。1964年にはラスベガスでの国際ファッションフェスティバルに参加、1965年にはニューヨークで初の海外コレクション発表を成功させた。作品はニーマン・マーカスなどの高級百貨店で取り扱われることとなり、日本のシルクなど質の高い素材をふんだんに使い、デザインの細部まで気を配った鮮やかな色彩の衣装が評判となった。また、1963年には日本でプレタポルテ部門、VIVIDを立ち上げ、当時台頭しつつあった既製服産業にもいち早く反応している。『森英恵流行通信』はそうした中で始まった新事業であった。

¹ 『森英恵流行通信』は1969年3月発行の5月号(No.64)から『流行通信』と誌名を改め市販される一般誌に変わった。2008年1月号より休刊している。

第1期：創刊号～第21号

創刊号(図1)は1966年(昭和41)5月10日の発行。新聞のような見た目の、全ページ白黒の会報という印象の冊子であった。8ページ構成で1ヶ月に三回刊行された。月千円の会費でメンバーをつのり頒布され、メンバーになるとヨーロッパや香港への見学旅行や、年に二回開催される森英恵コレクションに抽選で招待されるなどの特典もあった。第19号より12ページに増量し、第21号から月二回の刊行へ変更された。

創刊号の特集は「ショートスカート」。まだミニスカートという言葉も普及していない1966年当時、このスカート丈がいかに新しく、人々の注目を集めていたかがうかがえる。サブタイトルには「それはどこからやってきて、どこへいくのでしょうか—この現代服飾界最大のテーマの背景と展望!」とあり、創刊号のトップを飾るにふさわしい意欲的な内容となっている。3ページにわたって書かれたこの記事には記名がないが、創刊号から数えて500号目となった『流行通信』2005年2月号²によれば、これを記したのはファッションジャーナリストの小池一子だという。小池は当時を振り返り「ファッションは時代の変化をいち早く表現するメディアだということをミニスカートの登場が象徴すると必死に告知した。」といい、創刊号にかける制作側の意欲が相当のものであったことが想像される。

第2号以降も「白と黒(現代の色)(第2号)」、「カクテルドレス(第3号)」、「水着を巡って(第4号)」など読み応えのある特集が続く。それらはいずれも「ごいっしょに考えてみませんか。色についての感覚を研ぎ澄ませて夏を迎えるために—」、「カクテル・ドレスを中心に、ドレッシイな装いについて考えましょう」などと読者に考察を促す見出しがつけられており、当時の制作サイドの意欲的で真剣な姿勢が伝わってくる記事である。第1期前半は特に記述量が多いことからその傾向が強く、後半になるにしたがって誌面に占める写真の割合が増え、徐々に弱まる印象である。色やアイテムについての特集に加えて、「アクセサリ(第6号)」、「ドレスとサイズ(第13号)」、「今のヘアデザイン(第14号)」など、衣服そのものではないが装いを完成させるのに不可欠な要素や、「メンズウェア(第5号、第15号)」「こども服(第7号)」といった女性以外の装いについても特集された点にも注目したい。特に第5号の「夏のメンズウェア」特集では、女性の装いは男性の装いと対比的に、あるいはセットで見られることが多いことを前提に、女性のモード創造のためにメンズウェア研究は不可欠とし、ビートルズやモッズをはじめとする当時注目のロンドン・ファッションを紹介、さらには洋服を着用する男性陣の心の構え方(細かいことにこだわるのではなくて、流行は踏まえつつTPOに合わせて選んだ服装を堂々と自信を持ってき

² 『流行通信』第500号では「歴代カバー列伝」と題して創刊号から500号までの表紙デザインをダイジェストで振り返ったほか、各時代で『流行通信』に関わったデザイナーや写真家、イラストレーター、ジャーナリストらに、印象に残った記事や企画についてアンケートを取っている。小池一子もアンケートに回答した一人である。

こなして欲しい)にまで言及しており興味深い。「心構え」という点で言えば第21号の特集は「リール・ガール」であり、これはバイタリティにとみ、あるがままの自分でどの場面にも果敢に向かう、型にはまった既存のエレガンスに挑む新しい女性像とのことである。同号表紙には、まっすぐに正面を見つめるジャクリーヌ・ケネディの顔写真(図2)が掲載されている。そこには、「リール・ガール」の代表と目される彼女の率直で飾り気のない人柄がにじみでており、結局装いを完成させるのはどのようなテクニックよりも着用者から滲み出る品性だという、極めて普遍的で、それゆえごまかしのきかない事実をはっきりと読者に伝えている。

第8号から、第10号まではニューヨーク・コレクション、パリ・コレクション プレビュー、パリ・コレクションとコレクション特集が続いた。先にも少し触れたが、紙面に占める写真の割合が増えるのはこの3冊からである。それまでよりもページに対して写真が大きくレイアウトされることにより、写真の力で強く印象付ける誌面へとその作りが変更され、相対的に冊子全体の文字数が減少した。のちに冊子は創刊当初の倍以上である20ページへと増量されることになるのだが、その契機はこの編集方針の転換にあったのではないかと考えられる。そのシーズンのコレクションの性格、一定の傾向を説得力をもって示すためには多くのページを必要とするためである。

巻頭を飾る特集記事のほか、第1期は特にモデルや女優、写真家、音楽家など文化人たちが特集にリンクした内容のコメントを寄せたり、インタビューに答えるコーナーも充実している。いずれも森英恵にゆかりのある人物ばかりであり、森の仕事の広がりや想像させる面白さがある。森の当時の仕事を知ることができるコーナーとしては、森が日記のように綴った「私の一日」も見逃せない。コレクションの準備、ショーの開催、日航の制服お披露目、仮縫いに出張、ミーティング、原稿執筆、合間に観劇…と目まぐるしく動く森の様子が小気味好い文体でありありと描き出される。第6号に収録された66年7月1日の記事には、ビートルズのコンサートに出かけた感想が記されていて殊に興味深い。若さが生み出す新しさや影響力について考察しながら、売れ過ぎてしまったビートルズの窮屈さや虚しさを想像し、彼らの心情を思いやる言葉が書かれていて、森の人柄をうかがわせる記事となっている。「私の一日」は創刊当初から第37号まで続き、その後少しの空白をへて、第42号からはもう少しコラムの性格が強くなった「ある日の私」、第49号からは再び日記形式に戻っての「私の雑記帳(帖)」へと受け継がれた。変化しながらも、森の仕事ぶりや日々の思いを伝えるコーナーは『森英恵流通信』を通して続いた。

第2期：第22号～第41号

第22号から20ページに再び頁が増やされ、内容の充実が図られた。この号は'67年春の森英恵コレクションの特集号、続く第23号はニューヨーク・コレクション、第24号はパリ・コレクション、とここで3号連続してコレクション特集となった。その流れを受け、

森のプレタポルテラインであるVIVIDの特集号、森が提案する新作衣装の特集号などもこの後は制作されるようになる。国内の流行については海外の動向のように、特集を組んだりトピックを立てるなどして触れられることはなく、第22号を皮切りにした森の新作発表、特集をもってそれにかえているようである。海外コレクションの特集号には第2期に入りますます力が入れられ、ニューヨーク特集の際には第8号、第12号でも登場した在ニューヨークの大石尚が特別リポーターとして、パリ特集の際には森がコメントを寄せることもあったが、カルダンの専属マヌカン(モデル)で森の親友でもある松本弘子が、マヌカンという立場を活かしたコメントやリポートを寄せていく。

この期の最新の話題としては、雑誌『ELLE』から人気に火がつき、時代のアイコンとなったモデルのツイッギーを、第25号、第28号、第29号(表紙)で紹介したほか、第25号ではサンローランのスモッキングから刺激され広まったパンタロンルック(図4)を、第26号では'67年春のパリ・コレクションの話題をさらったパコ・ラバンヌのプラスチックドレスと、ビニールやラメニットなどの新素材を紹介したことなどが挙げられる。

第35号から、先述のパリ在住のマヌカン、松本弘子の連載「ヒロコ(ひろこ)のさろん」がスタートする。連載ではパリのファッション界を取り巻くトピックスや、パリジェンヌたちの暮らしぶりがうかがえるテキストを執筆し、人気を得て第57号まで継続した。

第3期：第42号～第63号

第42号(図3)はリニューアル号となった。表紙のデザインがピンクや黄緑といった鮮明な強い色を背景に、ファッションナブルな女性のイラストが配されるものに一新され、同時に判型がB5サイズへと小さくなった。しかしページ数は28へとさらにボリュームアップし、内容の充実が図られた。この時のリニューアルについては第41号の巻末で、「海外モードの動向と森の最新コレクションを伝えることに注力していく」と予告されていた。その方針の表れか、創刊号から続いてきた読者からの質問コーナーが、第44号を最後に姿を消した。このコーナーは創刊期には重視されており、同時代を生きる読者と共にこの情報誌を作っていこう、生の声を反映させた新鮮な本にしようという編集部の態度が示されたものだった。創刊号で「メンバーのみなさんのご質問、ご意見で構成したいとおもいます。技術上の問題を中心に、何なりとご質問をお寄せください。」「次号からの積極的な参加をお待ちしております！」と記されスタートし、実際に第2号以降はメンバーからの多岐にわたる質問、例えばアイテム別の適切な布地選びや縫製について、さらにはふさわしい研修旅行先や海外の技術学校の連絡先など、かなり混み入った質問にも丁寧に回答がなされていた。このコーナーはその質問内容から消費者というよりも、森と同じように縫い子を雇い、洋装店を持つデザイナーなど、製作者としてファッションと深く関わる女性たちへの応答という性格が強かったことが想像される。そのため、既製服の需要の高まりと共に、一点一点の製作に関することがらよりも既製服のデザインをも左右する海外コ

コレクションの動向の方を編集側は注視するようになったという、当時の状況を示しているのかもしれない。

第55号はコレクション大特集号とされた(図5)。8月15日、30日合併号として55ページと冊子を分厚くし、パリ、ニューヨーク、ローマと主要3大コレクションを、デザイナー別に作品図版を掲載して大々的に伝えた(図6)。その興奮冷めやらぬ第56号では一転、「明治百年」をテーマとした森英恵の'68~69秋冬コレクションを特集した。日本が西洋化に踏み切ってからちょうど百年という節目にこの国を見つめ直し、そろそろ日本独自の良さを持った洋服を生み出そう、一緒に考えよう、という森の意欲的な姿勢を示すこのコレクションは、海外に目を向けるのとは一見逆の発想から来たもののように見える。黒い背景にモデルが浮かび上がる写真を多用し(図7)、ページ下部に白のエリアが設けられ、そこにドレスの注釈を示すという、白と黒のコントラストを活かしたレイアウトも効果的で、読者に第55号とは全く違う強烈な印象を与える。その手法は実に鮮やかである。海外コレクションの特集号が、その動向を把握することを通し、次にはどのように自分の作品や着こなしのスタイルを作るかを読者に問うているとすれば、「明治百年」をテーマとしたこのコレクションは、森なりの回答が示されたものと捉えることができよう。「日本」を見つめるこのコレクションは、長年海外に目を向けてきた経験が相対的に浮かび上がらせた「日本」の姿である。

また、第4期ではこのほか「俺たちに明日はない」の主人公の女の子、ボニーのスタイルを真似るボニー・ルックの登場を紹介した(第44号)のを最初に、第48号「暗くなるまで待って」でのオードリー・ヘップバーン着用のジバンシイによる衣装、第58号「バーバレラ」のパコ・ラバンヌ制作の衣装などと海外映画の衣装についての話題や視点も紹介された。映画と衣装の深いかわりについては、森自身も熟知しているところであり、自身も「シネモード・デザイナー」と呼ばれた経緯もあることを考えれば、こうした記事の登場は遅いくらいだとさえ言えよう。

まとめ

以上見てきたように、第1期は意欲的な特集記事を中心に、写真で見せる誌面が定着し『森英恵流行通信』の方向性が基礎付けられた。それを踏まえ、続く第2期ではコレクション記事が充実し、森英恵作品の紹介にも力が入っていく。第3期はその傾向に拍車がかかり、創刊期に注力していたコーナーがなくなるといった動きが見られた。どの時代を取っても、「いま」を「ファッション」という切り口からどう捉えるかという大きな問いに向き合い続けた、制作側の真摯な姿勢が伝わる、熱量の高い雑誌であったことは間違いない。

参考文献

石辺啓道「流行通信 東京：流行通信, 1969-」『文化所持大学図書館所蔵服飾関連雑誌解題・目録』2005年

『流行通信』500号、2005年2月号、有限会社インファス・パブリケーションズ
「森英恵 仕事とスタイル」展覧会図録(2015年、島根県立石見美術館)

(当館主任学芸員)



図1：創刊号表紙



図2：第21号表紙



図3：第42号表紙



図4：第25号表紙



図5：第55号表紙



図6：第55号パリコレクション特集 (ピエールカルダン)



図7：第56号、'68～'69 森英恵秋冬コレクション「明治百年」特集

内容抜粋

*記事タイトル-サブタイトル 著者の順に記載。不明な場合は空欄とした。

*記事中に織り込まれるコメントやトピックは必要に応じて()にして抜き出した。

*同一のコーナーについて表記のブレがあるが原文どおりとした。

1号 特集：ショートスカート それはどこからやってきて、どこへ行くのでしょうか-この現代服飾会最大のテーマの背景と展望! (コメント：安井かずみ、立木義浩、サトウサンペイ、雪村いづみ、高橋歌子) /インタビュー：お帰りなさい松本弘子さん/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日

2号 特集：しろとくろ 現代の色/インタビュー：白と黒は私の色…入江美樹さんに聞く/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日 森英恵

3号 特集：カクテルドレス/インタビュー：好みは、はっきりしています……語るひと 雪村いづみさん/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日 森英恵

4号 特集：'66水着をめぐる 日本で、水着はファッションになっているのでしょうか-その周辺の問題を考えてみたいのです…/インタビュー：あたり前のもののよさを知ること…伊丹一三さんのファッション談義/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日 森英恵

5号 特集：夏のメンズウェア いま、世界の眼を集めているロンドン・ファッション(コメント：岡本太郎、マイク・真木、市川染五郎)/インタビュー：イギリス人は、つくづくおしゃれですね……語るひと 団伊玖磨さん/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日 森英恵

6号 特集：アクセサリー(コメント：加賀まりこ、桂ユキ子、星野醍醐郎)/インタビュー：ジュエリー・デザインについてお話ししよう 語るひと 山田礼子さん/海外の傾向と話題/質疑?応答!/私の一日 森英恵

7号 特集：こども服/インタビュー：“色と色の仲良しさん” ごっこ ゲスト 中村メイコさん/海外の傾向と話題(最近のロンドン・ファッションから)/質疑?応答!/私の一日 森英恵

8号 特集：ニューヨークコレクション <流行通信>特別リポーター 在ニューヨーク 大石尚(アメリカのデザインのポイント、縞 格子 杉綾の進出、シャンペン・カラー ワイン・レッド、アン・シンメトリー オフ・ネック、金と銀が主役、シフォンラメ、部分的にかざるシーキーンズやビーズ、オリエントのかたち)/私の一日 森英恵

9号 特報：パリコレクション プレビュー号(Chambre Syndicale (オートクチュール組合)とカルダンの投げた波紋、各オートクチュールの傾向、ディオール店ポーアのミリタリー調、シャネルいぜん活躍、勇敢なデザイナーたち、スカートと足もとのおしゃれ)/私の一日 森英恵

10号 特報：パリコレクション(カルダンのいき方を中心に、全体の傾向あれこれ)/私の一日 森英恵

11号 特集：帽子について-オートモードからスカーフ調まで、現代の帽子のさまざまないきかた(アドバイス：平田暁夫)/私の一日 森英恵

12号 特集：毛皮 <流行通信>特別リポーター 在ニューヨーク 大石尚(若い人のものになってきた毛皮、人気上昇中のジャパニーズ・ミンクと仔羊、一般化してきたミンク……、品不足気味のキツネ……、最高級品と言われるチンチラ…、なめしのこと染色の

こと、毛皮の手入れと保管)／海外の傾向と話題／
質疑?応答!／私の一日 森英恵

13号 特集ドレスとサイズー合理的なドレスメーキ
ングのためのサイズとは?／インタビュー：このほど、
NDKの招待で、ニューヨークのオアターン・メーキ
ングの教授が来日。6日間にわたり講習会を行った。
このひとミスター・パブプロフを今回のゲストに迎えて
／海外の傾向と話題／質疑?応答!／ニューヨーク
から読者のみなさまへ 森英恵

14号 特集：いまのヘア・デザイン／インタビュー：
黒髪の美しさを自慢してほしいのですよ 語るひと：
名和好子さん／海外の傾向と話題／質疑?応答!／
私の一日 森英恵

15号 特集：メンズウェア／インタビュー：おしゃれ
はリクツではありません… 式場壮吉／海外の傾向
と話題／質疑?応答!／私の一日 森英恵

16号 特集：ニット・ファッション／インタビュー：な
ぜか白にばかり惹かれるのですよ… 語るひと：新球
三千代さん／海外の傾向と話題／質疑?応答!／私
の一日 森英恵

17号 特集：長い丈 そこに象徴される女らしさ／イ
ンタビュー：動いているシルエットの美しさを… 語る
ひと：横須賀功光さん／海外の傾向と話題／質疑?
応答!／私の一日 森英恵

18号 特集：コート めだって変化してきたコートの
ありかたと考えかた／インタビュー：やあ、サント・ノー
レおしゃれな坊やだね! 語るひと：為永清司さん／
海外の傾向と話題／質疑?応答!／私の一日 森英
恵

19号 欠

20号 特集：トラベルウェア／ TRAVERING イラス

ト：根本一彦／ヨーロッパおしゃれ見て歩き 宗広貞
芳／私の一日 森英恵

21号 特集：LOOK '67 新しい女性“リールガールを
マークしよう!” 型にはまったエレガンスに挑む新し
い実力者《リールガール》とは?／“REAL GIRL”/
海外トピックス／読者だより／質疑応答／ヨーロッパ
駆けある記／私の一日 森英恵

22号 特集：1967 SPRING COLLECTION OF
HANAE MORI “東洋” ……そのよそおいのことは
／東洋の魅力／《こんにちは!! 東南アジア》森英恵
／パリ遊学記 荒牧太郎／海外トピックス／読者だよ
り／質疑応答／私の一日 森英恵(日航ユニフォーム
制作について)

23号 モードの焦点 世界のトップモードは“きらめ
く女性美”でした 森英恵／特集：ニューヨークコレ
クション 若返るいっぽうのデザイン—ミニパンツ登
場 <流行通信>特別リポーター 在ニューヨーク 大
石尚／'67パリコレクション速報／海外トピックス/
読者だより／質疑応答／私の一日 森英恵

24号 特集：パリコレクション(高くかかげだ“若さ”、
伝統を捨てたクーチュリエ、スーツが復活!絹のブラ
ウスを組ませて…………)／パリコレクションのバックス
テージ／海外トピックス ヒロコのパリコレクション
評 —松本弘子さんのパリ通信—／読者だより／パリ
コレクションを作ってみましょう スクエアネックの着
やすいコート／質疑応答／私の一日 森英恵

25号 特集：パンタロン—なぜベールごしに美し
さをひけらかすことにピリオドをうったのか?/
PAJAMA PARTY パジャマパーティー —アメリカ
の上流夫人パジャマパーティーがお好き—／海外ト
ピックス／読者だより／質疑応答／私の一日 森英
恵

26号 特集：あたらしい素材／WHAT 'S NEXT?
この次は何?／海外トピックス／読者だより／質疑
応答／私の一 日 森英恵

27号 水族館《水族館》がテーマの67年春夏
VIVID 特集)／人魚姫 原作：アンデルセン 抄訳：
村上純／質疑応答／私の一 日 森英恵

28号 特集：レインコート 雨だれの中ではえる
生き生きしたコートを!／ただいま到着「世界からの
もっとも新しいアクセサリ」／海外トピックス 松
本ヒロコさんのパリ便り ヒロコのマタニティドレス
を見てください…………／読者だより／質疑応答／私
の一 日 森英恵

29号 特集：ことしの夏の柄(柄が主役、プリントは
ワンピースで、素材もいっぱい)／バレンチノファン
レディ達はローマ経由がお好き／海外トピックス ア
ヌーク・エーメのおしゃれ拜見／読者だより／質疑
応答／私の一 日 森英恵

30号 特集：涼しい服のくふう／“プリムガール”
PRIM GIRL イタリアの新しい女性像 おすまし女性
／海外トピックス ミニスカートが嫌いなココ・シャ
ネル／読者だより／質疑応答／私の一 日 森英恵／
AIR MAIL 森英恵

31号 特集：夏のブティック 新しいアクセサリ／
FOR SUMMER 最もあたらしい此の夏のアクセント
／海外トピックス 日本のファッション ジェット時代
に突入《……ドレスは単にきれいという以上のもの
あるべきだ》ニューヨークタイムズに載った森英恵コ
レクション、カウボーイルックーヨーロッパ、不織布
時代くるか?ーヨーロッパ／読者だより／質疑応答／
私の一 日 ーニューヨークだよりー 森英恵

32号 特集：ミニ・スカートーちょっぴり日焼けし
たひざ小僧の行方!／秋の処方箋、フランス既製服

業界を牛じる無名デザイナー、日本人も活躍……／
ニューヨーク便り ニューヨークの夏 文：吹田靖子
／読者だより／質疑応答／私の一 日 森英恵

33号 特集：'67～8 ニューヨークコレクション <
流行通信>特別リポーター 在ニューヨーク 大石尚
(モードの世界に新次元、ニューデメンション、ミディ
レングス、シャーロックホームズズケープ、立体的になっ
た宝石飾り、モアレとサテン)／ニューヨークルポ ア
メリカのデパート／読者だより／質疑応答／私の一
日 ーアメリカ、ヨーロッパの旅1 森英恵

34号 特集：パリコレクション 《グランド・ダム》
の再登場、コード67～68パリコレクション)／the
lankygirl ランキーガール登場／私の一 日 ーアメリ
カ、ヨーロッパの旅2 森英恵

35号 特集：ロンドンルック あたらしい世代／ヒロ
コのさろん1 在パリ 松本弘子／海外トピックス キン
グス・ロード ファッション／私の一 日 ーアメリカ、ヨー
ロッパの旅3 森英恵

36号 特集：VIVID 森英恵'67秋・冬新作《ユトリ
ロの世界》／質疑応答／私の一 日 ーアメリカ、ヨー
ロッパの旅4 森英恵

37号 特集：森英恵'67～8作品発表会《宇宙》／
ヒロコのさろん2 松本弘子／私の一 日 森英恵／森
英恵のアメリカの旅

38号 特集：ことしのニット '67-'68KNIT.(ヴィヴィ
ド・ニット・グループ、および、ひよしやブティックの
作品紹介)／海外トピックス／ヒロコのさろん3 在パ
リ 松本弘子／読者だより／写真ページの編み目と編
みかた／海外だより1 流行通信特別リポーター 小
池一子

39号 特集：コート(ブティック HANAE MORIの

作品紹介)／ヒロコのさろん4 松本弘子／海外トピックス／海外だより2 流行通信特別リポーター 小池一子

40号 特集：1967～8パーティドレス／海外トピックス／ヒロコのさろん5 松本弘子

41号 特集：ニューヨークのホリデイファッション＜流行通信＞特別リポーター 在ニューヨーク 大石尚／ヒロコのさろん6 (在パリ)松本弘子／海外トピックス／海外だより3 流行通信特別リポーター 小池一子

42号 リニューアル号 爪 森英恵／特集：モード展望 ネオ・ロマンチズム／森英恵におしゃれ商法を聞く 聞く人：林邦雄／ロマンチックモードに合う新しい髪型：カールヘア／流行の花冠ラインのスカート／ある日の私 忙しい日々の中にも心過ぎるふるさとへの郷愁 森英恵／ヒロコのさろん 松本弘子／ソ連のファッションハウス 今井田勲／質問コーナー／私のお店ご紹介 銀座「ひよしや」その1

43号 アンコールワットの大晦日 森英恵／特集：モード展望 新しい時代の社交着／ネオ・ロマンチックのアクセサリ／若者が作り、町から生まれる 今日ファッション(若さと自由の象徴“ミニ”、ミニスカートのおいたちと主張、先導に立つ若者たち、新進デザイナーとその作品、ミニスカートのゆくえ、ミニの前身 サックとモズ、ゲルンライヒのすべて)／ヒロコのさろん「ある贈り物」のお話 松本弘子／ロンドン通信 がらくたの好きな娘たち 小池一子／質問コーナー／私のお店ご紹介 ファッションハウス 森英恵 銀座店その2

44号 私のオフエリア 森英恵／特集：1968年春 森英恵 コレクション“オフエリア”を主題にして／新しい髪型とメーキャップを考える 揺れ動く美しさ フリフリ… 名和好子／'68年春の流行はどう動くか／あ

る日の私 感激と不安が交錯するショーの直前 森英恵／ヒロコのさろん ベベとド・ゴール将軍 松本弘子／私のひとりごと 客のゆくへ 今井田勲／質問コーナー／私のお店ご紹介 新宿・モードサロン 森英恵 その1

45号 パリ・コレクションに思う 森英恵／特集：パリ・コレクション '68春夏&ニューヨーク・コレクション 流行通信特別リポーター(在ニューヨーク)大石尚／ある日の私 私には明日がある 森英恵／ヒロコのさろん 松本弘子／私のお店ご紹介 新宿・モードサロン 森英恵 その2

46号 春はネービーブルー 森英恵／特集：タウンスーツの新しい傾向／ミニの創始者 マリー・クワントの本格派ミニ・モード／新しいアクセサリ／ある日の私 デザインの底には一本の筋がある 森英恵／ヒロコのさろん 松本弘子／私のお店ご紹介 日本橋・森英恵モードサロン

47号 マタニティのこと 森英恵／特集：森英恵 マタニティ・コレクション／春を着るセーター／靴／モデルの新星 グリタリング・ベリンダさん／ヒロコのさろん 松本弘子／私のお店ご紹介 新宿・ひよしや

48号 サイケデリック・ファッション 森英恵／特集：ワンピース／サーフィン・ポップ 本橋政子／海外モード 流行のネクタイルック／スクリーン・モード「暗くなるまで待つて」より／私の雑記帳 森英恵／私のお店ご紹介 日本橋・三越 森英恵コーナー

49号 美しさと実用性 森英恵／特集：森英恵 夏のコレクション 花のプリント／ベルト／海外モード ビーズとメタル／夏のコレクションから 縞と格子／ひろこのさろん 松本弘子／私の雑記帳 森英恵／私のお店ご紹介 京都・藤井大丸百貨店3階 森英恵の店

50号 デザイナーの使命 森英恵／特集：夏の旅行

着…キュロット! (森英恵コレクション)/長袖のシャツ/連載1 森さんとおつきあい 今井田勲/ひろこのさろん ジャンヌ・モローの素顔1 松本弘子/夏のアクセサリ 大きな耳飾り/スクリーン・モード “魚が出てきた日”に出てきた四年後のリゾートファッション?/私の雑記帳 森英恵/私の店ご紹介 名古屋・名鉄百貨店3階 森英恵の店

51号 この夏の婦人服素材動向/特集:夏のVIVID!/夏のあくせさりい 製作:和田隆/真夏のニット…/対談:二人の椅子 今日のファッション 南部あき(服飾評論家)、森英恵/海外メモ/海のリゾート 海の向こうからやってきたリゾートウェア八点/連載2 森さんとおつきあい 今井田勲/ひろこのさろん ジャンヌ・モローの素顔2 松本弘子/リゾート商戦展望/私の店ご紹介 札幌H・B・C三条ビル 森英恵モードサロン

52号 真夏のドレッシィ 南部あき/特集:真夏のドレッシィ(森英恵コレクション)/秋のニット情報/秋のニット特集/海外メモ/連載3 森さんとおつきあい 今井田勲/ひろこのさろん パリのストライキ 松本弘子/リバイバルモードの流れにのって話題を呼ぶミュージカル映画“スター!”のコスチューム/森英恵ニューヨーク通信 森英恵/私の店ご紹介 広島・天満屋百貨店2階 森英恵の店

53号 ファッション・レポート マキシ時代は来るか? 変化するスカート丈の問題とその影響 岩田周作/特集:スカートのデザイン(森英恵コレクション)/海外メモ特報 ウィメンズ・ウエア・デイリー紙に載った記事紹介/森英恵アメリカ通信/秋のニット・第二報 ニットの新作(森英恵コレクション)/マキシのニット/ファッションの脇役(銀の味、パフスリーブ)/連載4 森さんとおつきあい 今井田勲/私の店ご紹介 軽井沢 森英恵サマーショップ

54号 '68年秋冬の流行断面 南部あき/特集:

あきと冬のVIVID!/秋・冬の布地傾向は?/簡潔で……美しい……コート/海外メモ/連載5 森さんとおつきあい 今井田勲/ひろこのさろん パリのストライキ余話 松本弘子/ファッションの脇役 ニットのスカート/私の雑記帳 森英恵/私の店ご紹介 新宿 プティック・ひよしや

55号 コレクション展望 '68-'69秋冬/特集:'68-'69秋冬コレクション特集!パリ……ニューヨーク……ローマ……/HANAE MORI NEWYORK COLLECTION/ニューヨークのファッション 在ニューヨーク 大石尚/イタリアンコレクションの特異性/コレクションメモ/私の雑記帖 森英恵

56号 コレクション前夜 森英恵/特集:明治百年一九六八年—一九六九年秋~冬 森英恵コレクション発表/海外メモ/ファッションの脇役 あたらしいドレッシィな靴/パリの高級既製服 Pret a porter AUTOMNE HIVER '68~'69 パリの服飾界は三重構造/連載最終回 森さんとおつきあい 今井田勲/ひろこのさろん サントロペのバカンス 松本弘子/私の雑記帳 森英恵/私の店ご紹介 日本橋・ディックビル ディックアベニュー・ひよしや

57号 美しいマタニティドレス 南部あき/特集:マタニティの新作(森英恵コレクション)/'68-'69秋冬 森英恵コレクション発表 第二報! スーツとコート/海外メモ/新しい話題……新しい素材その1 海外の新繊維と新しい加工技術/ひろこのさろん サントロペの別荘開き 松本弘子/私の雑記帳 森英恵/

58号 対談:ふたりの椅子 お客さま:松本弘子、森英恵/特集:皮と毛皮の時代(秋冬の海外コレクション分析記事)/ファッション・レポート 皮と毛皮の流行とその周辺 岩田周作/映画「バーバレー」より SF的コスチュームと一緒にブーツもお忘れなく……?/新しい話題・新しい素材その2 日本でもシ

ルキー合織あいついで登場!／海外メモ／私の雑記帖 森英恵

59号 12月のドレッシー 南部あき／特集：VIVID 冬の新作／簡潔に表現されたロマンチズム 夜の装いのための髪型 Hair-do by Alexandre & Corita／あくせさりいのにゆうす 永華の舞 ダイヤモンド・インターナショナル賞を授与されたネックレス デザイン 高際久子／12月のニット(森英恵コレクション)／ファッション・レポート 日本のシルク 岩田周作／続・皮と毛皮の時代 懐かしいファッション／海外メモ／私の雑記帖 森英恵

60号 欠

61号 特集：海外モード 1 ニッカーボッカーのスキーウェア／ファッション・レポート ことしのスキーウェア情報!／ファッションの脇役その1 ブルゾンのデザイン／ファッションの脇役その2 ジップのデザイン／フォトピックス クレージュ来日／特集：海外モード2 華やかな夜を彩るドレス／海外メモ／映画「ファニーガール」の話題 バーブラ・ストライサンドの登場

62号 欠

63号 欠

BULLETIN
OF
IWAMI ART MUSEUM

No.12

2018

IWAMI ART MUSEUM
SHIMANE JAPAN

島根県立石見美術館

研究紀要 第12号

発行日-平成30年3月30日

編集発行-島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷-株式会社タイピック